

NewsLetter



日本サルコペニア・フレイル学会
Japanese Association on Sarcopenia and Frailty

第23号 2025.12

第13回日本サルコペニア・フレイル学会大会のご案内

2026.10.31-11.1 Tokyo

貯金と貯筋で健康長寿を！筋労感謝の日 ～サルコペニア・フレイル研究の最前線

第13回学会大会大会長 海道 利実より

この度、第13回日本サルコペニア・フレイル学会大会を、**2026年10月31日（土）・11月1日（日）の両日、シェーンバッハ・サボー（東京）**にて開催させていただくこととなりました。本学会は第1回から第3回までは研究発表会でありましたが、2017年の第4回から学会大会となり、今回、節目である10回目の大会を主宰できますことを、大変光栄に存じます。

さて、本学会大会のテーマは、「**貯金と貯筋で健康長寿を！筋労感謝の日～サルコペニア・フレイル研究の最前線**」といたしました。なお「貯筋」は、福永哲夫先生（東京大学名誉教授、早稲田大学名誉教授、鹿屋体育大学名誉教授、順天堂大学客員教授）の商標登録です。

「貯金」と「貯筋」という響きの類似には、人生をより豊かに、健やかに生きるための二つの“蓄え”という意味を込めております。金融資産を計画的に積み立てるように、筋肉という身体的資産を日々の生活の中で少しずつ蓄積していくことが、健康長寿を実現

する上で極めて重要です。また「筋労感謝の日」という副題には、学会開催が例年11月ということもあり、私たちの身体を支え、日々の活動を可能にしてくれる筋肉に感謝を捧げ、その働きを労うという想いを託しました。ユーモラスな表現の中にも、**サルコペニア・フレイル対策の本質を、より身近に、そして楽しく**感じていただける契機となりますような願いを込めました。（次ページへ続く）



第13回学会大会

大会長 海道 利実

（聖路加国際病院
消化器・一般外科）

第13回日本サルコペニア・フレイル学会大会のご案内

さらに、本テーマの根底には、聖路加国際病院名誉院長・日野原重明先生が提唱された「健康長寿」の理念が息づいております。日野原先生は、「人は何歳になっても成長できる」との信念のもと、生活習慣の改善、社会参加、心身の調和の大切さを生涯にわたり説かれました。サルコペニアやフレイルの予防・克服は、まさにこの理念を科学的・実践的に具現化する取り組みであり、**人々が自立と尊厳を保ちながら生涯を全うするための基盤**であります。

本学術集会では、基礎研究から臨床応用、さらには地域・社会との連携に至るまで、サルコペニア・フレイルに関する最新の知見を網羅的に取り上げる予定です。医学・薬学・歯学・看護・リハビリテーション・栄養・介護・福祉など、多職種が一堂に会し、**学際的な議論を深めることで、臨床現場への還元と社会的実装を目指します**。また、若手研究者や臨床家の積極的な発表を歓迎し、次世代の人材育成にも力を注ぎたいと考えております。

また私は常々、「一医師である前に、一社会人であれ」との信念のもと、人間教育や“人財”の大切さを説いています。そこで今回、特別講演としまして、医学以外の世界からご高名な方々をお迎えし、人材育成やダイバーシティ、接遇の話など普段聞くことができないお話を賜りたいと考えておりますので、どうぞお楽しみください。

さらに今回は、「おもてなしの心」を大切にした運営を心がけております。**参加者の皆様に、学びと交流の時間を快適に、そして心温まるものとしてお過ごしいただけるよう、スタッフ一同が一丸となって準備を進めております**。学会という場が、知識の共有だけでなく、互いを尊重し支え合う“心の交流”の場となりますことを願っております。

本学会大会が、サルコペニア・フレイル研究の更なる発展と、多職種連携の深化、そして健康長寿社会の実現に寄与する契機となりますことを心より願っております。多くの皆様のご参加を心よりお待ち申し上げます。



シェンバツハサボーHPより<https://www.sabo.or.jp/kaikan-annnai/sabou-fin02/kaikan-annnai3.html>



- 地下鉄（有楽町線／半蔵門線／南北線）「永田町」駅・4番出口より徒歩1分
- 地下鉄（銀座線／丸の内線）「赤坂見附」駅より徒歩8分

第12回日本サルコペニア・フレイル学会大会 開催報告

吉村芳弘（大会長）、長野文彦（実行委員長）より

第12回日本サルコペニア・フレイル学会大会を、2025年11月1日（土）・2日（日）の二日間にわたり、熊本市の熊本城ホールにて開催いたしました。本学会の歴史において初の九州開催となりましたが、お陰様で想定しておりました**700名**を大きく超える多くの皆様にご参加いただき、盛会のうちに無事終了することができました。ご参加、ご尽力いただきました全ての皆様に、心より厚く御礼申し上げます。

今大会のテーマは「知行合一～サルコペニア・フレイルの臨床本質～」といたしました。このテーマには、研究成果と臨床での実践とが融合することの重要性、そして臨床での革新的なイノベーション創出を促進したいという思いを込めました。



吉村芳弘（大会長）、長野文彦（実行委員長）

会期中は、特別講演、シンポジウム、各種セミナーなど多彩なプログラムが展開されました。特に一般演題では、過去最高となる**158演題**もの貴重な研究成果をご応募いただき、活発な議論が交わされました。その中から選出された優秀賞セッションも行われ、閉会式にて最優秀賞を表彰いたしました。

また、会期前後のAWGS2025プレスセミナーや懇親会、さらに早朝イベントの「熊本城Run & Walk」なども大変盛況となり、学術的な議論のみならず、参加者の皆様の活発な情報交換と交流の場となりました。

この成功もひとえに、全国からお集まりいただいた実行委員の皆様、座長・演者をお引き受けいただいた先生方、ご協賛いただいた企業の皆様、そしてご参加いただいた皆様一人ひとりのご協力と熱意の賜物と、深く感謝しております。

本大会での議論や交流が、今後のサルコペニア・フレイルに関する研究、臨床のさらなる発展に繋がることを心より祈念いたしまして、開催報告とさせていただきます。誠にありがとうございました。



第12回サルコペニア・フレイル学会大会 —AWGS/GLISプレスセミナー—

サルコペニアの概念と診断の最新知見：AWGS2025及びGLISより

大会最終日のプログラムで代表理事である荒井秀典先生よりサルコペニアの概念と診断の最新知見の講演あり、そこでは今回の改訂の最大の特徴は、身体機能がサルコペニアの診断基準から除外されたことが報告されました。

近年、サルコペニア（筋肉量・筋力・身体機能の低下）への関心が高まる中、アジア圏での診断・介入指針を定めるAWGSと、世界的に“統一定義”をめざすGLISの動きが、改めて注目され、両者が提示する「概念」と「診断の最新知見」の整理がされました。今回、サルコペニア2025コンセンサスでは以下の4点で大きく変わりました。



黄 啓徳

医仁会武田総合病院
疾病予防センター

1. 概念が大きく変わりました。

これまでのサルコペニアは主に「高齢者の病気」として捉えられていました。しかし、2025年の新しい基準では、考え方が大きく進化しました。単に高齢者の病気として診断するだけでなく、中年層（50～64歳）を含め、人生全体（ライフコース）を通して筋肉の健康（Muscle Health）を守っていくことが大切だとされています。また、サルコペニアは、健康で長生きするために不可欠な「骨格筋の機能」そのものだと捉え直されています。つまり、病気になってから治すのではなく、いかに筋肉を健康に保ち続けるかが最も重要になりました。

2. 早期発見（チェック）のポイントが示されました。

病院に行く前の段階で、自分で気づいたり、地域の健康診断などでチェックできるようになっています。これらのチェックで「可能性がある」と判断されたら、専門的な検査に進みます。

3. 新たな診断（確定）の基準。

専門的な検査では、「筋力」と「筋肉量」の2つを測ります。①筋力の測定：一般的に「握力」を測ります。②筋肉量の測定：専用の機器（DXAやBIA）を使って、体全体の筋肉量を測ります。最終的な「サルコペニア」の診断は、「筋力低下」と「筋肉量の低下」の両方がある場合になります。

4. 治療・ケアは「連携」がカギ。

サルコペニアと診断されたら、治療やケアは一つの方法ではなく、様々な専門家が協力する「集学的介入」が重要になります。また、臓器との相互作用を考慮し、筋肉は単に体を動かすだけでなく、他の臓器とも影響し合っているため、全体を考慮したケアプランが作られます。そして、継続的な管理行い、ケアプランを実行した後も、年に一度のチェックや、病気にかかった後などに再評価を行います。

よって会員の皆様には今後の診断にAWGS 2019ではなくAWGS 2025を使用することを留意していただき、医療・介護・福祉などへの啓蒙のほどよろしくお願い致します。

詳細は当学会のホームページにて会員限定になりますが、AWGS2025アルゴリズム日本語版と原著論文が公開されています。

Asian Conference for Frailty and Sarcopenia (ACFS2025) 参加報告



笥 慎吾
東京女子医科大学
リハビリテーション部

2025年10月19～20日、台湾・高雄榮民総合病院(Kaohsiung Veterans General Hospital)にて、Asian Conference for Frailty and Sarcopenia(ACFS2025)が開催されました。本学会は、アジアを代表するフレイル・サルコペニア研究者が一堂に会する国際会議であり、今年のテーマは「Enhancing Muscle, Empowering Vitality」でした。会場は病院内の講堂で、臨床と研究が融合した活気ある雰囲気にも包まれていました。

開会式では、Liang-Kung Chen教授(Asian Association for Frailty and Sarcopenia会長)より、AWGS2025の新たなコンセンサス改訂方針が紹介されました。Nature Aging誌にも掲載され、今後のアジアにおけるサルコペニア研究の大きな転換点となる重要トピックです。

基調講演では、荒井秀典先生(国立長寿医療研究センター)が「デジタルヘルスによるフレイル・サルコペニア予防指針」を紹介し、運動と栄養、そしてデジタルヘルスを活用した予防的介入の重要性を強調されました。フランス・トゥールーズ大学のPhilippe de Souto Barreto教授は、「Intrinsic Capacity centile curves for monitoring function during aging」において、WHOのICOPEの中核概念である内在的能力(Intrinsic Capacity)を成長曲線のように評価する新たなパーセンタイル曲線モデルを提示されました。また、カナダ・Dalhousie UniversityのKenneth Rockwood教授の講演では、フレイルを老化のラベルではなく、可逆的かつ動的なプロセスとしてとらえる視点が示され、教授の穏やかな語り口と力強い眼差しが印象的でした。

日本からは、若林秀隆教授(東京女子医科大学)が「リハビリテーション栄養によるフレイル・サルコペニア予防の最前線」を講演され、リハ栄養の重要性を示されました。前田圭介教授(愛知医科大学)は、アジア版カヘキシア基準(AWGC)のリスク分類の臨床的有用性を報告され、筆者も嚥下障害患者におけるAWGC基準のリスク分類の妥当性を報告しました。発表後は活発な討論が行われ、国際的な視点から日本の臨床研究の意義を再確認することができました。

日本サルコペニア・フレイル学会誌の最新号（Vol.9 No.1）では、「**心不全におけるサルコペニア・カヘキシアの複合的アプローチ**」と題した特集が企画されており、8編の特集論文が掲載されています。また、原著論文6編、症例研究1編が掲載されています。なお、最新号に掲載の全文にアクセスするためには、日本サルコペニア・フレイル学会誌J-stage 閲覧情報（ID、パスワード）が必要となります。会員専用ページからご確認ください。さらに、会員専用ページにて以下の採択投稿論文を先行公開しております。ぜひ、ご覧ください。本誌に掲載された最新情報が、いち早く会員の皆様の目に触れる機会となり、明日からの研究や臨床に役立てて頂けることを願っています。



牧迫 飛雄馬

鹿児島大学

医学部保健学科 教授

最新原著論文（会員専用ページで公開中）

タイトル：**通所リハビリテーション利用者に対するThe Figure-of-8-Walk Test の基準関連妥当性について**

筆頭著者：隅野 裕之（社会医療法人 生長会 介護老人保健施設 ベルアモール）

タイトル：**地域在住高齢者における歯磨き頻度と主観的認知機能低下との関連**

筆頭著者：徳持 裕子（国立大学法人滋賀医科大学医学部看護学科）

タイトル：**高齢者の社会参加活動に関連する要因の探索：活動種類別の分析**

筆頭著者：奥井 菜穂（国立大学法人滋賀医科大学医学部看護学科）

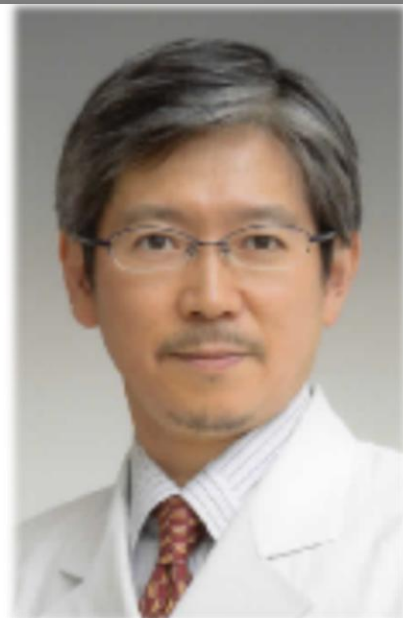
サルコペニア・フレイル指導士制度委員会より

サルコペニア・フレイル指導士に関するご報告

◆サルコペニア・フレイル指導士活動奨励賞について
本年度より、サルコペニア・フレイル指導士として地域や臨床現場で活躍した先生に、活動奨励賞を贈ることになりました。初回となる今年度は、以下の2名の先生が受賞されました。おめでとうございます。

・ **地域貢献部門：**
前島 悦子 先生（大阪体育大学 スポーツ科学部）
体力若返り講座 in 大阪体育大学

・ **臨床実践部門：**
森 博康 先生（新潟医療福祉大学 健康科学部健康栄養学）
糖尿病のある方へのサルコペニア・フレイル指導士の臨床実践：食事療法の新たなエビデンス創出と社会への啓蒙普及



佐竹 昭介

日本サルコペニア・
フレイル学会認定指導士
制度委員会 委員長
国立長寿医療研究センター

次年度以降も、活動奨励賞を授与する予定ですので、指導士としての活動を学会として支援していきたいと思っております。各部門の対象者は以下の通りです。

- ・ **地域貢献部門：**地域におけるフレイル予防、健康教育、介護予防支援などを通じて、住民の健康寿命延伸に寄与した者
- ・ **臨床実践部門：**医療・介護施設において、サルコペニア・フレイルの評価や介入、チーム医療への貢献、多職種連携の推進など、臨床現場で高い実践力を発揮した者

◆サルコペニア・フレイル指導士資格更新について
サルコペニア・フレイル指導士は現在478名が在籍しており、このうち2021年度認定の361名が来年度に更新期を迎えます。指導士の更新には、学会大会参加や論文掲載、指定講演受講などで合計30単位の取得が必要で、1回の学会参加で最大15単位を取得できます。

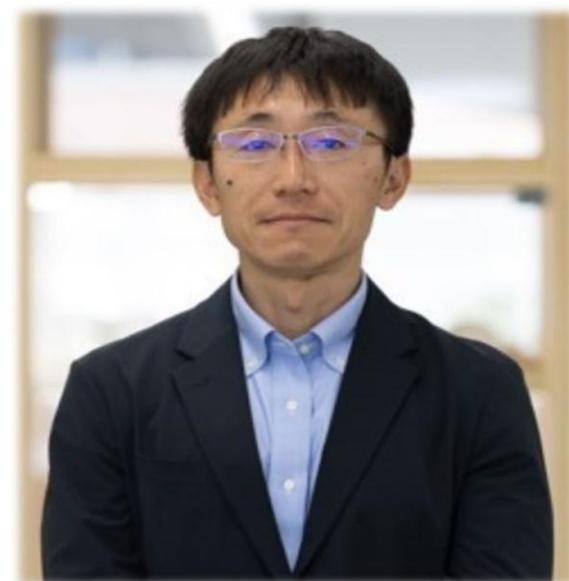
また、来年度の更新を目前に控え、更新予定者が必要単位を満たせるように「資格更新者用講習会（10単位）」を実施しております。本講習会では、講義に加えて、サルコペニア・フレイルの評価と治療をテーマとした症例検討ワークショップを組み合わせ、指導士としての実践力向上につながる内容としています。更新期を迎える指導士の皆さまには、ぜひ本講習会をご活用いただければ幸いです。

サルコペニア・フレイル指導士活動奨励賞コメント

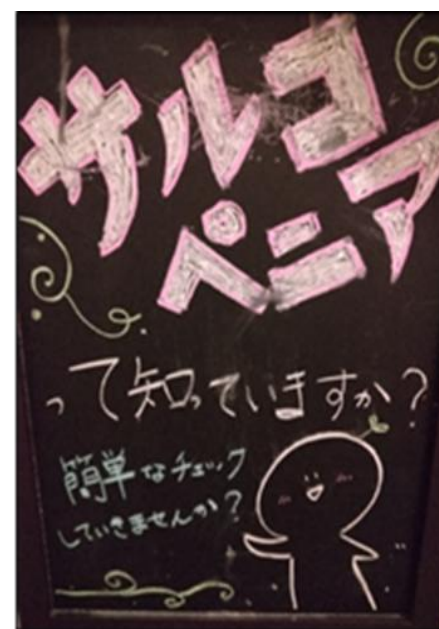
新潟医療福祉大学健康科学部健康栄養学科の森博康です。このたびは、このような栄誉ある賞を頂戴し、学会関係の先生方をはじめ、ご支援くださった医療スタッフの皆様にご心より感謝申し上げます。今回、臨床実践部門で受賞いたしました活動内容は「糖尿病のある方へのサルコペニア・フレイル指導士としての臨床実践」です。前職の徳島大学病院アンチエイジング医療センターでは、主に糖尿病のある方を対象に、サルコペニアやフレイルに関する療養指導を行ってまいりました。徳島県は高齢化率が非常に高く、内科外来を受診される方の中には、サルコペニアやフレイルを併発している方も少なくありません。

また、徳島大学糖尿病臨床・研究開発センターでは、新たな糖尿病治療の確立を目指し、日常臨床で生じたクリニカルクエスチョンをもとに、糖尿病やサルコペニアに対する食事・運動療法の有効性をランダム化比較試験により検証し、我が国の診療ガイドライン作成に貢献することを目的としております。

これらの臨床研究から得られた成果を通じて、診療報酬改定や治療ガイドラインの根拠となる、臨床実践で活用できる療養指導方法をいくつか明らかにすることができました。徳島では、サルコペニア・フレイル指導士として、臨床実践から臨床研究まで多岐にわたる活動を展開し、多くの医療スタッフの皆様にご支援をいただきました。（次頁へ続く）



森博康
(新潟医療福祉大学
健康科学部
健康栄養学科)



サルコペニア・フレイル指導士活動奨励賞コメント

2025年4月からは、新潟医療福祉大学健康科学部健康栄養学科に着任いたしました。着任早々ではありますが、サルコペニア・フレイル指導士としての新たな活動も始まっています。同年5月および10月には、新潟市内の地域商店街イベントにおいて、管理栄養士を目指す学部生や、健康栄養学の研究者を志す大学院生とともに、サルコペニア予防を目的とした地域実践活動を行いました。まずは地域住民の皆様にはサルコペニアやフレイルを知っていただくことを目的に、指輪っかテストや握力測定、食事療法に関するパンフレットの配布などを実施しています。活動に参加する学生たちも地域イベントに慣れており、頼もしいメンバーです。今後は、新潟においてもサルコペニア・フレイル指導士として、地域実践や研究など、多岐にわたる活動を展開してまいります。

ICTを用いた栄養食事指導の事例について②

【対象・方法等】

2型糖尿病患者に対して、対面形式での個別栄養食事指導と遠隔形式の個別栄養指導が代謝状態及び食行動に与える効果を比較検証した事例。



図 テレビカンファレンスシステムを利用した遠隔栄養指導した例

出典：森ら、臨床栄養Vol135, No1, 2019.7 14-15

サルコペニア・フレイル指導士活動奨励賞コメント

このたび、「第1回サルコペニア・フレイル指導士活動奨励賞」を賜りました。**長年にわたり地域の健康づくりを支えてきた「体力若返り講座 in 大阪体育大学」の活動が評価されたこと**を、大変光栄に思っております。当学会代表理事である荒井秀典先生、認定指導士制度委員会委員長である佐竹昭介先生はじめ関係各位に深謝申し上げます。

本学では、2013年に健康づくりを目的とした本講座を開講し、以来10年以上にわたり継続的に地域の健康増進に取り組んでまいりました。講座は、健康に関する講義と、運動を中心とした実践活動で構成されており、**大学の専門知識とスポーツ施設を地域に還元する形で運営されています**。今回の受賞は、体育系大学が有する「スポーツ・運動」という学術的資源を社会に活かし、地域住民の身体機能の維持・向上に寄与している点を認めていただいたものと受け止めております。（次ページへ続く）



前島悦子

大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科
スポーツ科学部スポーツ科学科健康科学コース



サルコペニア・フレイル指導士活動奨励賞コメント



また、この講座は単なる健康教室にとどまらず、大学教育の一環としても重要な意義を有しています。健康科学コースの学生たちは、地域の中高齢者とふれあいながら、運動指導の実践を通して、コミュニケーション能力や支援技術を学び、健康づくりの専門家としての素養を身につけています。こうした世代間交流の経験は、将来、学生が地域や医療・介護現場で活躍する際の貴重な基盤となります。

サルコペニアやフレイルの予防には、医療の枠を超えた総合的な取り組みが求められます。今後は、医師や看護師、栄養士、療法士に加え、体育・スポーツ分野の専門家、健康運動指導士、さらには地元自治体や地域包括支援センターなど、多職種・多分野が連携することがますます重要になると考えています。**身体活動の専門性を有する体育系大学がその連携の一翼を担うことは、国民の健康寿命延伸に向けた社会的使命でもあります。**

「不断の努力により智・徳・体を修め社会に奉仕する」という大阪体育大学の建学の精神のもと、今後も本学の知見と地域の力を結集し、サルコペニア・フレイル予防に貢献できる取り組みを継続してまいります。

論文紹介

Potential framework of the Global Leadership Initiative in Sarcopenia (GLIS) criteria based on muscle mass and/or strength for predicting survival in cancer patients: A nationwide multicenter cohort study



Zhenyu Huo, et al. Clin Nutr, 2025 Jun;49:187-201. doi: 10.1016/j.clnu.2025.04.021.

阿部 咲子
帝塚山大学
現代生活学部
食物栄養学科 准教授

GLIS (Global Leadership Initiative on Sarcopenia) 基準によるがん患者の生存予測に関する研究について紹介します。本論文は、サルコペニアの国際的診断基準であるGLISを用いて、がん患者の生存率予測における有用性を検証した全国規模の多施設共同研究です。

本研究では、中国国内16施設から登録された6,471人のがん患者を対象に、筋肉量 (Lean Mass Index: LMI) および下腿周囲長 (Calf Circumference: CC)) と筋力 (Hand Grip Strength: HGS (握力)) を評価指標として用い、Kaplan-Meier法およびCox比例ハザードモデル (Cox Proportional Hazards Model) による解析を行いました。その結果、筋肉量または筋力が低い患者では生存率が有意に低下し、両方が低い場合には死亡リスクが最大 (HR = 2.01、Hazard Ratio: ハザード比) となることが示されました。さらに、多変量解析においてもGLIS基準は独立した予後因子として有効であることが確認されました。

本研究の長所として、全国規模の大規模データを用いた高い信頼性、中央値50ヶ月という長期追跡、簡便な評価法 (CCやHGS) の有効性、そしてGLIS基準のがん領域への応用可能性が挙げられます。

本論文は、GLIS基準をがん患者の予後評価に活用する可能性を示した初の大規模研究であり、今後の臨床診療や研究において重要な指針となるものです。さらに、簡便な評価法を用いることで、日常診療におけるサルコペニア評価の普及が期待されます。

国際学会の紹介

日本サルコペニア・フレイル学会に関連深い国際学会を紹介します。

Asian Association for Frailty and Sarcopenia

(AAFS) は、2017年に設立された国際学会で、アジアのフレイル・サルコペニア研究を推進し、専門家が連携して成果共有や診療指針作成、教育活動を進め、高齢化に伴う地域課題に対応しています。地域特性を踏まえた実践にも力を入れ、アジア全体の高齢者医療の質向上を目指す取り組みが進んでおり、国際交流も活発です。

第12回アジアサルコペニアフレイル学会は2026年12月5・6日にネパールのカトマンズで開催予定です。

12th Asian Conference for Frailty and Sarcopenia, to be held on December 5-6, 2026, in Kathmandu, Nepal.

<https://aafs-asia.org/>

International Conference on Frailty & Sarcopenia Research (ICFSR) は、研究者、臨床医、イノベーターが集い、栄養、運動、老化科学に基づく治療法などを通じて、フレイルの予防、身体機能の維持、依存状態の遅延を目指す介入方法を探っています。特に近年は、WHOが提唱する「Intrinsic Capacity（内的能力）」の概念が注目されており、健康寿命の延伸に向けた多面的なアプローチが議論されています。

第16回学会が2026年3月10日～12日に米国ワシントンD.C.のジョンズ・ホプキンス大学ブルームバーグセンターにて開催予定です。

<https://frailty-sarcopenia.com/>



神野麻耶子

独立行政法人国立病院機構
高知病院
リハビリテーション科



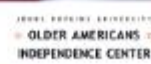
16th Edition 2026



March 10-12, 2026

Hopkins Bloomberg Center
Washington, DC, United States

www.frailty-sarcopenia.com



国際学会の紹介

Society on Sarcopenia, Cachexia, & Wasting Disorders (SCWD) は、2008年に設立された国際・学際的な非営利学術団体で、サルコペニア、悪液質、消耗性疾患に関する研究・教育・臨床支援を推進しています。第18回SCWD学会は2025年12月11～13日にローマで開催され、世界の研究者・臨床医・学術専門家・各業界のリーダーが最新の知見や研究成果を情報共有します。急速に発展する分野の動向を把握できるほか、国際的な専門家との交流を通じて臨床・研究の発展につながる貴重な機会となるでしょう。2026年は12月10-12日にワシントンDCで開催されます。

<https://society-scwd.org/>



Australian & New Zealand Society for Sarcopenia & Frailty Research (ANZSSFR) は、オーストラリアとニュージーランドにおけるサルコペニアとフレイルの臨床・基礎・トランスレーショナル研究を推進する学会です。研究の促進、知識の普及、臨床応用、政策提言、若手育成を主な柱としています。毎年7月4日にはWorld Sarcopenia Day Webinarが開催され、今年のメルボルン大学カーク博士の講演動画を含め、過去の英語講演も視聴可能です。

<https://anzssfr.org/>



The Global Leadership Initiative on Sarcopenia (GLIS):
Defining a Pathway into the Medical Glossary

図は2025年のものです。 <https://youtu.be/Ozekv66mJhs>